
after story ~ **名前を捨てた勇者伝**

むらまき雀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

after story 名前を捨てた勇者伝

【Nコード】

N6544X

【作者名】

むらまき雀

【あらすじ】

その昔勇者は魔王を倒し姿を消した。世界「デー」に平和が訪れてから400年、世界は再び魔に覆われ始めていた。そんな時、本来なら今日成人の儀を迎えるはずだった角なしユニコーンの少年ラクサ。幼いころ角をなくし一族から「落ちこぼれ」の烙印を押されていたが突然現れた人間の女に「弟子になれ」と言われ旅に出ることに。しかしこのお師匠様、なんだか訳ありのよう…。最強師匠の謎に少年の成長、そして再びの勇者召喚！？薄幸少年は幸せを手にすることはできるのか…。様々な人が織りなすまったりたまに

登場人物（前書き）

随時更新していきます。

登場人物

主人公

ラクサ（12）

ユニコーン族の少年。幼いころに両親を亡くしている。魔物に襲われてユニコーンの誇りである角を失う。角なしの『恥さらし』と言われるが12歳の成人の儀の日に、のちの師匠に出会い、師事する。

実は400年前の勇者の片腕ユニコーンの英雄ラビダテの子孫であり、それを密かに誇りに思っている。素直で実直。角がコンプレックス。手先が器用で閃光弾や、その他密かになかなか物騒なものを作ってストックして持っている。木イチゴが好物。ギルドでの一件で師匠が大好きに。師匠をバカにされるとキれる。目標は亡き父と同じで『王都の武道大会で優勝すること』

容姿

枯れ葉色の髪に住んだ赤い眼をしている。

副主人公

師匠またはレディ（20代前半に見える）

ラクサの師匠。名前がなく、昔捨てたと話す。謎が多く年齢、出身などは不明。いろいろな種族の弟子がいるという。その強さは未

知数でとにかく強いらしい（ラクサ曰く最強）。
穏やかで怒ることはめったにないが訓練はスパルタである。
国家や組織を嫌い避けている。世界情勢にはあまり興味がないが勇者召喚のうわさを気にしているようだ。
魚が好物。かわいい小物や髪飾りなど見るのは好きだが、買うことはしない。

容姿

長い黒髪を頭の上で結んでいる。日の下では茶色に見えるが実は黒目。

ミス・サンドリヨン

レディの愛猫（親友）

はじめはごく普通の猫だったのだがレディについて冒険するため
に魔力と人語を会得した。その方法は不明。レディとは違い毒舌で、
怒ると怖い。好物は魚。量より質タイプ。
放浪癖があり、魚のない地域へ行くと家出することがある。

レディがラクサを弟子に取った時はちょうど家出中で、その後港
町ササラで会うことになる。

また家出時には独り立ちした弟子たちの様子を見に行っているらしく、
さばさばしている半面非常に面倒見の好い性格をしている。

プロローグ〈少年の旅立ち〉（前書き）

初めてファンタジー物を書きます。正直言ってよくわかりません……。おかしなところがありましたらご指摘お願いします。

プロローグ〈少年の旅立ち〉

400年前、世界 > デイ< は魔王に支配されようとしていた。だが神により選ばれた女勇者により魔王は倒され世界に平和が訪れた。

城に戻った女勇者は王子と婚約した。人々は三日三晩祝い続けた。しかし、結婚前夜宮廷魔術士ハバスの陰謀により勇者は城から姿を消した。

これに激怒した王子はハバスを処刑した。由緒あるハバス家は没落し、以後歴史の表舞台に立つことはなかった。

その後、王子は国中を探させたが勇者は見つからなかった。勇者の仲間たちも次々を城を出て行き、世界にちりじりとなった。

ちらほらと入る勇者情報も発見には至らず、王子は婚約解消を発表した。婚約発表から5年後のことだった。

以後伝説となった勇者の行方を知る者はだれもない。

400年後、再び魔物達が強さを増し始めた。人々の間で魔王復活の声が囁かれるようになり、その声はラクサの住む西端のユニコ

ーンの森にまで広がりを見せていた。

ユニコーン族とは人間の姿で額に一本の角を持つ種族だ。ユニコーン族は誇り高く、特に額の角はその象徴だった。もし角が折れたりしたら『生き恥』と言われ自ら命を絶つ者までいるという。

とにかく角を失ったユニコーンは大変生きにくい一生を送ることとなる。今年12になるラクサ少年もその一人だった。

幼いころに魔物に襲われ角を失ったラクサは、もれなく一族の爪弾き者として暮らしていた。そんな辛い生活でも決して死を望まなかったのは一重に幼くしてなくした母の言葉があったからだ。

「いいわね、ラクサ。よく覚えておきなさい。私たちユニコーンはとても誇り高い生き物なの。だけどその中でも私たち家族、古の勇者の片腕として、角をなくしながらも勇敢に戦ったと云われるユニコーンの英雄ラビダテの血をひく私たちはもっと誇りを持って生きなくてはいけないのよ」

弱い者には手を差し伸べ、罪人には正義の鉄槌を。いつの日も勇者への尊敬の念を忘れず、その崇高なる精神を鍛えよ。

寝物語として聞かされた話。幼心にもこの身のに流れる英雄の血に胸が高鳴ったのを覚えている。

そして興奮冷めやらぬ中、遙か昔、勇者とともに世界を救った英雄の血を引く者として、誇りある生を生きようと誓ったのだった。

その誓いは今も胸の中、生きる寄る辺として掲げているが、年に

一度の成人の儀には落ち込む心を抑えきれない。

ユニコーンの成人はある年齢が決まっているわけではない。家長の許可を得た少年（暗黙の了解として12歳以上）は自分で拵えたナイフ一本で森の獣を一頭狩る。それができて初めてユニコーンの男として認められるのだ。

もちろんこれには角があるという前提条件がある。口惜しいことに。

したがって、ラクサは今年12歳であるが成人の儀を受けることができない。さらに言うならば一生成人することが出来ないのだった。

ラクサはこの日のためにと一生懸命作ったナイフを見つめた。そう、ラクサはもしかしたらという思いを込めて作っておいたのだ。無駄になってしまったが。

勇気を出して族長に直談判に行ったが、会わせてももらえなかった。

「はあ……」

ラクサは今日何度目かのため息をついた。集落の中央広場に今年成人を迎える少年たちが集まっているのが見えた。

その手にそれぞれのナイフと狩った獣を持ち、その姿は実に誇らしげだ。

ラクサはもう一度自分のナイフを見つめた。
悪くない出来だ。

ナイフの作り方など一族の誰もラクサに教えてくれた者はいなかった。悔しくて悔しくて、根性で作ったナイフにしては、それはとても立派な出来だった。

否、きつとあの中の子よりも上手く作れたはずだ。ラクサは一人こ

ちた。

だってこれは……。

「それ、成人の儀のナイフ？」

「!!!!」

ラクサが考えに浸っていると突然後ろから声が聞こえた。

驚いて後ろを振り向くと、奇妙な服を着た若い人間の女が立っていた。

女は呆然と自分を見上げるラクサに近づくと、ちよつと失礼と言つてひよいつとナイフを取り上げると四方からじつくりとナイフを見つめたり、ナイフで実際に木の幹を切りつけてみたりして「ふむふむ」と何やら考え出した。

女の突然の行動に最初はわたたと慌てたラクサだったが、女の思いのほか真剣な様子に次第に黙りナイフの出来栄えの結果をまつた。

そして十分に時間をとると「うん」と言つて女はナイフを返して言った。

「一人で作つたんでしょう？丁寧だし、うん、いい出来だよ」
女はラクサを見てニコツと笑った。

数秒後褒められたことに顔を真っ赤にしたラクサを見て、女はこれからのラクサの一生を変えるであろう言葉を言った。

「あなた、私の弟子になりなさい」

こうしてラクサは女の弟子となり、女はラクサの師匠となった。
二人はその日のうちにユニコーンの森を旅立った。

ラクサ12歳の春、長い旅の始まりだった。

プロローグ〈少年の旅立ち〉（後書き）

書き始めちゃいましたファンタジー物。この分野読むのは好きだけ
ど書くのは難しー！

読んでくださった方に感謝！！

1・ラクサと師匠

ユニコーンの森、暗くなって街道に出るのは危険だと二人は森の端で暖をとることになった。

いろいろと支度をしてやっとお互いの自己紹介となった。

そしてラクサは驚くことになる。

「私名前がないの。好きに呼んで」

突然の「弟子になれ」宣言の後、慌ただしく故郷を後にしたラクサだったが、心を占めるのは旅立ちの感慨よりも師匠となった「人間の女」のことだった。

何よりも謎すぎる。出会って半日、初対面の会話でさえ女が自身のことを語ることはなかった。

そしてラクサも名前を告げていない。お互いがお互いを知らないまま歩いて半日、あたりは暗くなり今日はここで野宿だ、と告げられた。

女は手近から枯れ枝を集めるとそれにフウと息を吹きかけた。するとたちまち火がつく。

ラクサは驚いた。魔法というものを見たのが初めてだったのだ。

そもそも魔力というものは誰もが大なり小なり持っているものらしいが、それを実際に扱えるのは王都の学院で学んだり魔術師に弟子入りした者たちだけだったからだ。

おずおずと焚火に手をかざす。暖かい。本物の炎だ。本物の魔術師だ。

ラクサは歓喜した。それと同時に目の前で鞆を探っている女に師

事し、冒険者になったんだという実感がわいた。

ラクサは勇気を出して女に話しかけた。

「あの、お名前は何と言うんですか？」

そして話は冒頭に戻る。

「名前がないって…もともとないんですか？」

「昔はあつただけだね。捨てたの」

あんまりな答えにラクサは思わず問い返した。だが帰ってきた答えは内容の割にさらっとした口ぶりで何があつたのか詳しく聞きたくなつたが、さすがに今日出来たばかりの弟子に教えるほど軽い内容ではないだろう、と思い自重した。

「だから、好きに呼んで頂戴」

「好きにつて…例えばどんな？」

「例えば、昔の子は『先生』とか『師匠』『スース』後は…ああ『マイディーア』なんてふざけたのもあつたなあ。今思えばよく許可したもんだ」

いろいろと思いだしているのか女はクスクスと笑つた。そして鞆から携帯食料を出して「旅初日が携帯食料なんて味気ないけどごめんね」と申し訳なさそうにラクサに渡した。

確かに味気ないが渡されたそれは通常の粉を固めた、いかにもまずそうなものではなく、女が自分で作つたのか中に乾燥した果物が練りこまれていて通常のものより遥かにおいしそうなものだった。

一口かじる。驚いた。

「普通のものよりおいしいとは思うんだ」

女の言うとおりとでもおいしかった。

「あの！お・お師匠様…は以前にも弟子をとられてたんですか？」

女、否師匠は「お師匠様」と何度か繰り返しまんざらでもない顔でうなずき呟いた。

「悪くない」

何が？

後になって聞いた話だが、ラクサのような素直で絵に描いたような従順な弟子を持ったのは初めてで、この時ラクサの「お師匠様」という純粋な呼び方にいたく感動していたらしい。曰く過去の弟子たちは皆一癖も二癖もあるやつらだったと。のちにラクサは旅の途中、その弟子たちに会うことになるのだが確かに皆個性的な面々で、師匠の苦勞がうかがえた。

だが、それらはすべて後になって知ったことだ。

「そうだね、まあ何人か。いろいろと」

師匠の返事は実に曖昧なものだった。

「いろいろと？」

「エルフとか獣人とかドワーフとか、まあいろいろと」

「……」

どう見ても二十代前半にしか見えないのに、本当にそれだけの弟子を一人前に育て上げたのだろうか。それともその姿は何かの術で若返っているのかもしれない。

ラクサはそれ以上聞くのをやめた。おそらくこれ以上聞いても師匠は「いろいろと」としか答えてくれないだろう。どうやら師匠には「いろいろと」謎があるらしい。

そしてラクサも自己紹介をした。

幼いころ両親を亡くし身寄りがないこと。角は昔魔物に襲われたときにおられたこと。手先が器用なこと。木イチゴの実が好きなこと。

そして勇者とその片腕ラビダテに憧れていること。

角の下りは出来れば言いたくない最大のコンプレックスだが、角がないのは明らかなので言わなければならぬだろうと思った。角なしユニコーンに『生き恥』『落ちこぼれ』の意味があることを知っているのかは分からないが、弟子の話からして、いろいろな種族と交流のある師匠ならきっと知っているのだろう。しかし、そのことについて師匠が言葉を荒立てることはなかった。

ただ一言「そう」と言ったきり黙った。難しい顔をして何かを考えているようだった。

実際に「誇りを失ったユニコーン」として同胞から罵られていたラクサは、ほっとした。そして、まだ数時間の付き合いだがそのような野蛮な行為を師匠がするのではないかと信じられていなかった自分を恥じた。

経緯はどうあれ自分はこの人に師事したんだ。師匠のことは信じなければいけない。

ユニコーンは誇り高く、実直な生き物なのだ。

お互いに自己紹介しているうちにあたりはすっかり夜の帳に包まれた。

ラクサは明日からのことについて話しておきたいことがあったのだが、なれないことはするものではない。集落からあまり出ることもなかったラクサは疲れてすっかり眠くなってしまった。

魔法の炎がパチパチという音を立てる。

ラクサが大きなあくびをすると「今日はもう寝ることにしよう」と師匠が言った。

そして、先ほどのカバンから暖かそうな毛布を出すとラクサに渡して言った。

「見張りは私がしているから、あなたはおやすみなさい」

ラクサは言いたかった。「師匠を差し置いて弟子が先に寝るわけにはいきません！」と。

しかし、まだまだひよっこ弟子のラクサには獣の出る夜の森の見張りなど出来るわけがない。主張とは裏腹にすでにラクサの瞼は閉じようとしていた。

そして霞む思考で師匠の「おやすみなさい、いい夢を」というやさしい声を聞いてラクサは眠りに落ちた。

こうして二人の旅一日目は終わった。

1・ラクサと師匠（後書き）

ようやく一日目が終わりました。これからどんな旅になることやら。とりあえずしばらくは二人の旅の様子を書いていきたいと思えますよ。

途中で思ったんですが、師匠とかラクサの容姿についてふれられてません！！！こりゃ一大事だ！！！！ということとで次回にいれるかキヤラ紹介でもするか考えます。なんだかなあ。

読んでくださった方に感謝！！！！

2・ラクサとやさしい朝

次に日の朝、ラクサが目覚めると昨夜の位置に師匠の姿はなかった。

ラクサは飛び起きた。もしや師匠の身になにかあったのだろうか、と慌ててぐるりを見回す。すると、少し離れた場所の切り株の上に、胡坐をかいて瞑想する師匠の姿があった。

いつからそうしていたのだろうか。師匠は完全に森と空気に溶け込んでいて、まるで時が止まったような錯覚に陥った。

小鳥が肩に乗っても師匠はピクリとも動かず静止したまま瞑想を続ける。

師匠の長い黒髪が朝日によってキラキラと輝く。それはまるで一枚の絵画のようでとても美しい光景だった。

その後ラクサは近づくことができず、瞑想が終わるまでその光景をずっと眺めていた。

「うい〜っと」

どのくらいの間だったのだろうか。バサバサと小鳥が飛び立つと共に師匠が大きく伸びをした。間延びした声で一度深呼吸。

そしてくるっとこちらを振り向くとにこりと笑って言った。

「おはようラクサ。気持ちのいい朝だね」

ラクサは驚きに目を見張った。

いつ振りだろう、「おはよう」で朝を迎えるのは。すっかり忘れていた感覚に、ラクサは感動で胸を詰まらせると、どうかこの幸せが少しでも続くようにと願いながら言った。どうかこの喜びが師匠に伝わりますようににと。

「おはようございます、お師匠様」

ラクサはにこりと笑った。そして心から思った。本当に素敵な朝だ、と。

こうして穏やかに二日目の朝は始まった。

「今日は人里に下りようと思うんだ」

朝食に、もいだ果実を食べながら師匠は今後の予定を話し出した。まず第一に冒険者となったラクサのギルド登録を行いたいらしい。必須ではないが、やっておいたほうが何かと便利に運ぶのだそうだ。そのためにギルドのある町に行きたいのだが、あいにくこの辺りは辺境でギルドのない村や集落ばかり。そこでここから一番近い港町ササラに行くことになったのだが…。

「まだまだ距離があるし、いくつか村も通らなきゃならない。街道

をたどれば自ずと旅人にかち合う。

…それで、ラクサが平気だというのなら聞き流してくれて構わない。だけでもし、もしその角のことで人目を気にするというのならこれを使うといい」

そう言つて一枚のバンダナを差し出した。それは鮮やかな紅色に染められ、金の糸で細かい刺繍がなされたとてもきれいなものだった。

「ラクサの瞳と同じ色でしょ？君の髪色にとても映えると思うんだ」
気に入るといいんだけど、とどこか自信なさ気に言う師匠。

一方でラクサは驚きに言葉を失っていた。

そしてふと、昨日師匠に角のことを言った時の様子が頭をよぎる。何かを考えていた師匠。まさか、これについて考えていたのだからか。

人目の多い場所でもラクサが気負うことのないように。傷つくことのないように。こんな立派なバンダナを用意して。

「お師匠様……」

実際ラクサは旅に少しばかりの不安を感じていた。これから出会う人々や同じ冒険者はきつと『角なしのユニコーン』を見たら、よく思わないに違いない。暴言や暴力を振るわれるかもしれない。

それまだいい。もしもそれが師匠にまで及んだら…。『恥じ知らずのユニコーンの師匠』として馬鹿にされるようなことがあったら…、きつとすぐく申し訳なく居た堪れない気持ちになるに違いない。そう思っていた。しかし…。

ラクサは思った。確かに師匠は出会ったばかりで、さらに不明な点が多い不審人物のような人だ。だがしかし、かつてこれほどまでラクサのことを思い向き合おうとしてくれた人はいただろうか。否。

ラクサは感動に震えそうになる手でバンダナを受け取った。

「お師匠様…、ありがとうございます。…とてもうれしいです」感謝の声が震える。最後の言葉はかすれてしまった。恥ずかしい。ラクサの頬が真っ赤に染まった。

そんな初々しいラクサの様子をうれしそうなやさしい目で見つめる師匠。さながら子を見守る母のように。

春のやさしい風がラクサを包む。新緑の木々がサワサワと音をたてて揺れていた。

ラクサはしっかりと大事そうに握りしめたバンダナを見つめて思った。

きっとこれは僕の一生の宝物になるに違いない。

このある種予感めいた思いは外れることはなく、生涯ラクサはこのバンダナを肌身離さなかったという。だがこれはもっとずっと後のこと。また別のお話である。

2・ラクサとやさしい朝（後書き）

予定ではラクサの初めての戦闘を書くはずが…、思いのほか朝ごはんの時間が長引きましたね（笑）次こそ戦闘です。多分。上手く書けるかな??不安です。

読んでくださった方に感謝!!!

3・ラクサと戦闘 前編

朝食の後、二人は出発した。

もちろんラクサの額には例のバンダナがしっかりと巻かれていた。

森を抜けると街道が続く。とはいってもあまり整備されておらず、ただ村と村とを繋ぐ田舎道という感じだった。利用者もあまりないようで人影は見えない。おかげでゆったりと旅が出来そうだとラクサは思った。

しばらく歩いていると沿道に魔物の足跡を発見した。

思わずラクサは師匠に問いかけた。

「お師匠様、ここにも魔物が出るんですか？」

「まあ出るだろうね、ここに跡があるんだから」

師匠の答えは実にあっさりとしたものだった。ラクサがあまりに不安がっているのがおかしかったのだろう。師匠はははと笑った。

そして安心させるようにラクサの頭にポンポンと軽く触れた。

「といつても、この辺が危険なのは夜だろうな。人気もないし明かりもない。野生動物なんかも出るだろうね。大丈夫だよ。魔物が活発化してきているとは言ってもまだ森や山の奥地での話で、むしろこういうところでは盗賊や追剥に注意したほうがいいだろうね」という師匠の話に、ラクサは一応の安心をしたものの、油断は禁物。もしもの時のため、腰に下げた短剣に触れあることを確認した。

その後も旅の注意点や持ち物、買い物仕方などを詳しく教わった。流石に多くの弟子を育てたというだけあって師匠は教え方がうまかった。ラクサの質問にも気を悪くすることなく何度でも答えてくれた。

「…じゃあ火はすごく大切なんですね」

「そう。魔術師がパーティーにしているとすごく便利。だけど何かの時のために用意だけはしておいたほうがいいね。例えば火打石とか…あと鏡も重宝するね」

「鏡ですか？」

「便利なんだよ。光を集めて火を起こすこともできるし、空を飛ぶ仲間に合図を送ることもできる。持っていて損はないよ」

師匠の話はラクサの知らないことばかりでとても為になった。

いろいろと話し、最後に戦闘についての話になるとラクサの目の色が変わる。「戦闘」はラクサにとって重要かつ最も難関な課題だ。ラクサは一言も聞き洩らすまいと耳を大きくした。

「いいね、大事なものは生き残ること。何があっても目を閉じない。それともし勝てないと思ったら悩むことなく逃げなさい。全力で」師匠は大事なことを言うようにラクサの目をまっすぐに見つめて言った。

「人は案外あっけなく死んでしまうものだよ。とくに君たちユニコーンは誇りのためなら死をも厭わず、なんて言うからね。ラクサ、覚えておきなさい。誇りのために死ぬくらいなら、生きて誇りを捨てなさい。生きていれば、誇りなんかよりもっと大切なものが見つかるはずなんだから」

いいね、と再度ラクサに念を押し、師匠はまた歩き出した。

相変わらず人気のない街道をひたすら歩く。

ラクサは師匠の後を追いなから、先ほどの言葉を思い返していた。正直言って普通のユニコーンなら到底受け入れられない話だと思う。しかしながら、ラクサは違った。

なぜならば、一族のアウトサイダーとして育った彼は、そこまでしっかりとユニコーンとしての自分を確立していなかったのだ。そしてそれ以上に、ラクサの胸の中にはすでに誇りよりも大切なものが芽生え始めていたからだった。そう、師匠という掛け替えのない絆が。

『生き残ることが大切』と師匠は言っていた。きつと師匠は多くの死を見てきたのだろう。真っ黒な服はその人たちを悼んでのことなのだろう。

誇りよりも大切なもの……。ラクサにとって師匠がそうであるように、師匠にとっても自分がそうだったらどんなに幸せだろう。なれるだろうか……。とラクサは思った。

昼を過ぎ、もう少しで今夜の宿となる村が見えてくるだろうというとき、師匠が急に走り出した。

「!!!お師匠様!?!」

ラクサも急いで後を追うと少し先に黒い影が見えた。さらに近づいてみると、なんとそれは血まみれの人間だった。

「っ大丈夫ですか!!!」

急いで駆け寄るラクサ。近づいてみるとよくわかる。黒い影は全身にけがをおった中年男性だった。師匠は急いで男性の全身に目を走らせる。けがは獣か魔物か、それに襲われたのだろう。見るからに痛そうな傷に、ラクサはさすがの思いで師匠を見つめた。

「お師匠様！この人の容体は？」

「大丈夫。傷の数は多いけど命に別状はないようだ。ラクサ、応急処置を頼める？」

「任せてください！！！」

だてに昔から毎日怪我をしていたわけじゃない。おかげでラクサは剣術の腕はからつきしだが怪我の治療と逃げ脚には自信があった。

師匠からの初めての課題にラクサは大きくうなずいた。

ラクサが腕の怪我に薬草を塗っていると「うつつ」と呻いて男性が目を覚ました。

「お師匠様！気がついたようです」

「！もしもし、大丈夫ですか？」

師匠はうつすらと目を開けた男性の目の上で手のひらをひらひらと振る。しばらくぼんやりと焦点の合わない目をしていたが、次第にはつきりとしてきて、急に師匠の手をがしつとすがるように握った。

「頼む！！助けてくれっ！！！」

「何があつたんです？」

師匠が落ち着いた声で問い返す。男は動いたせいで怪我が痛むのだろう、痛みに顔を歪めながらも師匠に答えた。

「魔物に襲われた！！この先の村！俺の村だ！！俺はどうか逃げてきたが村にはまだ人がいる！頼む助けてくれ！！！」

「大丈夫です。安心してください。村は必ず助けます。だからあなたは安心して休んでください」

男の決死の懇願に師匠はあっさりと答え、安心させるように柔らかくほほ笑んだ。

「すまねえ」

力尽きたのだろう。男はかすれた声で礼を言うと再び意識を失った。

そこからの師匠は素早かった。魔法で小鳥を召喚すると「この人を見ててね」といって男のそばに下ろした。そしてラクサに防御の魔法をかけると足元に魔法陣を展開した。

「私につかまって。一気に飛ぶから」

急いでラクサが師匠の腕をつかむとその瞬間、世界が歪んだ。

次に目を開けるとそこは魔物に蹂躪されている村のまん前だった。

ラクサは目を丸くした。聞いたことがある。『瞬間移動』それは今や使える者がいないという古代魔法だった。

「魔物は私が相手をする。ラクサは逃げ遅れた人やけが人をお願い。無理はしないで、出来る限りでいいから」

衝撃の事実にも固まりながらも、目の前の事態が最優先。それについては後回し、と頭を急いで切り替えてラクサは村の中に駆けて行く。

緊張と恐怖で震える手足を叱咤して、腰のナイフを握りしめた。

『目は閉じない、勝てないと思ったら迷わず逃げる、そして必ず生き残る』

ラクサは教わったばかりの戦闘の教えを心の中で繰り返す。

そしてメジハ村でラクサの初めての戦闘が始まった。

3・ラクサと戦闘 前編（後書き）

あああ、なぜか戦闘まで行かなかった！！長くなったのでここでカット。

タラタラと書きちゃう癖が出てきました。自重！自重！次こそ戦闘です。そして村の名前、逆から読むとハジメ村、安直です（汗

読んでくださった方に感謝！！！

4・ラクサと戦闘 中編

ラクサは早速村人の救助に当たった。怪我で動けない人や一人では避難できない老人たちを村の避難場所である穀物庫へ運んだ。それは村で唯一の石造りの建物で、村で一番強度がある為避難場所になっているらしい。

村の様子は、ラクサが想像していたほどひどい有様ではなかった。魔物が暴れて畑や家が荒らされている様子はあったが、村の者が魔物の出現に急いで燃やしたのだろう、魔物除けのリトナの草のおかげで被害は最小限で抑えられているようだ。どうやら死人もまだででない。

ラクサは胸をなでおろした。

「みなさん、もう大丈夫です。さあ怪我のある方は手を挙げてください。急いで治療します」

「大丈夫だと！？まだ魔物が村の中にいるんだ。ここにいつ入ってきてもおかしくない！！」

自分のことが精いっぱいですっかりそのことを忘れていたラクサ。そこでやっと師匠が魔物の退治をしていることを伝えた。村人たちもよほど気を張っていたのだろう、避難して人心地き顔色も真っ青だったのがだいぶ良くなった。

「それはよかった」

「ほんとうに。一時はもうだめかと思っただわ」

村人たちはすっかり一件落着モードになっていたが、ほっかむりをかぶった女性が今気がついた様で叫び声をあげた。

「大変！！娘が！！娘がいないわ！！」
「なんですって！？」

辺りは騒然とした。すると他からも声が上がった。「うちの子も！」
「うちの坊やもいないわ！！」
さめざめと泣く母親たち。ラクサが詳しく話を聞くと、どうやら三人は遊び仲間で今日も三人で朝から遊びに出ている。そしてそのまま魔物の襲撃に会い、そのどさくさですっかり存在を忘れられていたようだ。

「どうしましょう、あの子たちきつとこの場所を知らないわ」
「もう駄目かもしれない」
「お願いします！！どうかあの子たちを助けてください！！」

三人は必死の形相でラクサに縋った。ラクサは考えた。自分は戦えるわけではないのだ。もしも、三人を無事保護したとしても、そのあとに魔物に襲われれば三人が無事な保証はない。そしてラクサ自身の命も無事には済まないだろう。

ラクサは村の入り口での師匠の言葉を思い出した。

「無理はしないで、自分のできる限りでいい」

きつと師匠は「じつとしている」と言うだろう。自分のことを思うなら師匠の言う通り、隠れて師匠を待つのが一番いいと思う。だが、ここには自分以外、村人がたくさんいて、彼らはおそらく自分より戦うすべを持たないのだ。

ラクサは腰のナイフを見つめる。このナイフの意味、それは「一人前のユニコーンとしての証」

ラクサはギュッとナイフを握り直した。

「三人の特徴と行きそうな場所を教えてください！」
村人からの声援を背中に受けて、勢いよく村はずれの森へ走り出す。
迫りくる森とだんだん大きくなる魔物の咆哮に心の中で師匠に謝罪
した。

すみませんお師匠様。いいつけ守れそうにありません。

4・ラクサと戦闘 中編（後書き）

更新遅くなってしまってますみません…。次は師匠サイドのお話です。
今日ががんばって更新するぞ〜！！

読んでくださった方に感謝！！！！

4・5 女の戦闘(師匠サイド)(前書き)

師匠サイドのため師匠の三人称を「師匠」「女」にしています。

4・5 女の戦闘（師匠サイド）

女はラクサと別れてから魔物を斬り続けていた。走っては斬り捨て走っては斬り捨て……。まるで辻斬りのように、早速女の通った後には魔物の死体しか残らなかった。

女は自身の体重よりあるだろう大剣を、さも軽々と振りまわしてゆく。それはまるで敵が止まって見えているかのような早業で、誰が見ても女がものすごい使い手であるとわかるものだった。

一振り、二振り、三振りすると女の周りにいた魔物たちは倒れ伏す。女は、それをチラリと見ると技と神妙な顔を作り剣を鞘にわざわざ納めて言った。

「またつまらぬ物を斬ってしまった」

静まり返る戦場に、女はため息をつく。きっと今家出中の愛猫親友 なら、この快心のギャグをわかってくれただろうに。

「きつと君にはわからないんだろうな」

音もなく首めがけて飛んで来たナイフを風の魔法で吹き飛ばす。それと同時に雷の魔法『雷』^{いかづち}を放つ。

あたりにバリバリっという雷鳴が轟くと、避けきれなかったのだろう、ところどころ黒く焦げた魔族が姿を見せた。浅黒い肌に大きな鎌を持つその姿は、見る者に悪魔を思わせた。

「貴様…よくもやってくれたな。吾の可愛い部下たちを……」
魔族は短い髪を逆立てて「噛み砕いてくれるわ!!」と唸った。

それを涼しい顔で眺めていた女はにこやかな笑顔でこう言った。

「お久しぶり魔族さん。かれこれ400年ぶりくらいかな。これって感動の再会ってやつだよな、ウワ ナミダガデルヨ」

「なにっ！よ…よんひゃくねんぶりだと…！？ま…まままさか、き…ききき貴様は」

見る見るうちに顔色を真っ青にしていく魔族。それを面白そうに眺める女。先程までの威勢が全く見えない魔族に「ここだけ見ればわたしが悪者に見えそうだな」と女は思った。

「魔王復活なんて眉唾ものだと思ってたけど、この分じゃあ本当のお話なのかな？」

「そこんとこどうなの？と魔族に聞く女。声だけ聞けば実に穏やかだが、体は先程の大剣を抜き魔物につきつけている。魔統は震え上がった。

400年前魔王をメツタメタに叩き潰した勇者。実はこの魔族一度その勇者が戦っているところを見たことがあった。その勇者はたった一人で何百もの魔物を屍に変えた。その姿をはるか上空から見ていた魔族は思ったのだった。「魔物よりも魔物らしい」と。その後、魔族たちにして「その姿悪鬼のごとし」と言わしめた魔族のトラウマ「勇者」。その本人(?)を前にして魔族は土下座をする勢いで懇願した。

「おおおおお願いします！謝りますっ謝りますからどうか命だけはお助けをー！！」

「だめ。お話してくれなきゃ返さない。じゃあ戦闘開始5秒前…」

焦る魔族に無情にもカウントを開始した女。

「5・4・3・2・1・戦闘開始」

再び轟く雷鳴に、「ぎゃーーーーー!!」という叫び声が混じった。

その後、いたぶること数十分、命からがら何とか逃げ出すことに成功した魔族は4人の人影を発見する。そう、ラクサと行方不明だった三人の子供である。

その時、魔族の標的は変わった。最初は魔物を田舎から都市へ向かって大々的に暴れさせることにより魔王様の力が再び強まっていることを誇示することが目的だった。しかしそれが失敗し、女に痛めつけられた今早速そのやっ当なりに目的は変わった。

「ちくしょおーーーー、許すまじ人間!!」

魔族は一度大きく羽ばたくと再度標的に4人を捉えた。

その頃の女は。

「あーあ、逃げられちゃった。空を飛ぶなんて反則だよ」

と、これからのことなど知るよしもなく魔族の逃げた空を眺めていた。

4・5 女の戦闘（師匠サイド）（後書き）

魔族サンはぼろぼろ。師匠に高笑いされながらいじめられたと思います。次はラクササイドに戻ります。ちゃちゃっと更新行きますよ

読んでくださった方に感謝!!!

5・ラクサと戦闘 後編(前書き)

出だしは行方不明の女の子視点です。

5・ラクサと戦闘 後編

その日、リツテは朝食を食べると、家の手伝いもそこそこに、いつも通り近所の遊び相手のトキとルイーを連れて遊びに出かけた。

今日は村の裏手にある森でかくれんぼとサバイバルごっこをする予定だった。のどかな田舎道を三人で昨日の悪戯について話しながら歩く。

「あれはなかなか傑作だったね」
リツテが言った。

「だな。ロツソの爺さん全然気づかないで、一日あのままだったし」
ルイーはクククツと笑った。

リツテの言う傑作とは、村一番のひねくれ者ロツソ爺さんのさみしい禿げ頭にキリクの花の冠（村の祭りの時、娘たちがそれをしていと恋人募集中の意味になる）を載せるというものだった。悪戯は見事成功。三人は午後心地よく惰眠をむさぼるロツソ爺さんの頭に花を載せた。その後何事もなく日常生活を送る彼の様子を見て、三人が陰で笑い転げたことは言うまでもない。

結局夜鏡を見て心底驚いたのだろう、顔を真っ赤にしたロツソ爺さんが、リツテの家に乗り込んできて三人はボロクソに怒られたのである。

「こつてり母さんたちに怒られたけどね」
トキは散々叩かれたお尻をさすった。

「まだひりひりするよ。僕は当分いたづらはご遠慮申し上げたいな」

そんなこんなで、次の悪戯はあーでもないこーでもないと言い合いながら、楽しく過ごしていた三人は今現在、腰にナイフを下げた

ちょっと弱そうな少年に背中をかばわれながら、母親たちに口を酸っぱくして言われていた「いつか天罰が下る」という言葉を思い出し、心底後悔しているのであった。

目の前には実に愉快と言わんばかりの表情の魔族。見るのは初めてだが、今にも襲いかかって気そうなおーラをひしひしと感ずる。

三人は恐怖でいつもは無駄に働く頭を鈍らせながら心の中で誓った。

「ここから生きて帰れたらロッソ爺さんに土下座して謝ろう」と。

「ちょうどムシャクシャしていたところだ、貴様らまとめていたぶつてやる！」

ラクサは焦っていた。

まさか本当にこういう状況に陥るとは、ついてない。

震える三人を背中にかばいながら考える。この状況をいかにして突破するか。

第一に、あの魔族に勝つ、は論外。絶対無理！

第二に、戦いながら逃げる機会をうかがう。普通の冒険者ならそうするだろうが、主戦力は見習い冒険者のラクサだ。相手は空を飛ぶ上に魔法の上級者。これも無理。

第三に、ただ逃げる。戦えないのなら逃げるのみ。それにここは深い森だ。逃げ込めば空を飛ぶやつからこちらの姿は見えない。その上そこから魔法をぶつ放せば、その騒ぎを聞きつけて必ず師匠が助けに来てくれるはずだ。

師匠、今どこにいるのだろうか。無理をしない、という言いつけを絶賛ぶった切り中のラクサ。村の魔物はどうなっただろう。ここ一日ですっかりなじんだあの華奢な背中を懐かしく思った。

ラクサは気付かれないように鞆を探る。そしてつるつとした丸いものに手が触れるとそれを握りしめて相手の様子をうかがう。勝機は一瞬。相手の意識がこちらから離れた瞬間……、今だ！

敵が魔法を放つ瞬間、ラクサは握りしめたものを力いっぱい敵へ投げつけた。ラクサ渾身のストレート球。見事、ストライクだ！ 辺りがまぶしい光に包まれる。ラクサが投げつけたもの、それは手製の閃光弾だった。手先の器用さを手持無沙汰に、集落にいた時たくさん作っておいたのが役に立った。

「うわっ！！なんだ！！眩しい！！」

敵はあまりの眩しさに思わず目を覆う。魔族は強い光が苦手なはずだ。よし、今の内に。

「皆走って！！」

ラクサの陰で光の影響を受けなかった三人を急かし、森の中へ逃げ込む。

第一段階は成功だ。あとは死なないことを祈って師匠を信じるしかない。

後ろのほうから、すごい爆音と魔物の酒部声が聞こえてくる。

「逃げるがいい！どこまでも追いかけて貴様ら全員肉塊にしてくれらるっ……！！」

すさまじい殺気に思わず足が止まりかける。

しかしここで捕まるわけにはいかない。すぐむ身に鞭打って4人は木の間に縫って走る。

「とにかく逃げよう！お師匠様を信じて」

「どうした。もうかくれんぼは終わりか？」
ラクサは一人追い詰められていた。

あれからどれ位たったのだらう。順調に逃げていたかのように見えた4人だったがじりじりと追いつかれ、あわや一巻の終わりか！と思われたときに偶然にもまだ聖なる結界が残っているボロボロの神殿を見つけた。とっさのことにも、3人の子供たちをそこに押し込むことには成功したが次の瞬間、背中にもすごい衝撃を受けラクサが大きく吹っ飛ぶ。結界越しに見ていた3人は叫び声をあげた。

「ぎゃーーーーーーっ！！」「」

体を強く木にぶつけたラクサ。その衝撃に顔をゆがめうめき声を上げる……、かと思いきや思ったような衝撃がない。痛みもなければ傷もない。

どういうことだ、と眉を寄せた。

そこへ敵は近づくと面白いものを見るような顔をしてこう言った。

「ほお、流石はあいつの防御魔法…。これくらいの攻撃では傷もつかぬか……」

防御魔法…、そうか！

ラクサは思い出した。村へ入る前師匠が付けてくれたものだ。

ラクサは立ち上がり全身を確認する。…体は異常なし。あの3人も、聖なる結界に入ってしまったえば魔族には決して入ることはできない。もう安全だ。

問題はラクサ自身。さてここからどうやって逃げようか…。

逃げる方法を考え込んでいると魔族が無情にも言い放った。

「クククク。ここから逃げても無駄なことだ。貴様にかかったその魔法から、忌々しいあの女の気がぶんぶん臭う。どこへいっても逃げられない、貴様の未来は吾に切り刻まれるのみ……」

そう言うときい勢いでラクサに向かって突進してくる。両手には大鎌を持ちながら。

当等本当に追い詰められてしまったラクサ。背後にはぐるりと囲むように木が生い茂り、前には目前に迫る敵。

ラクサは死を覚悟した。そして師匠の教えを思い出す。生き残ることは無理だったがせめて最後まで敵から目を離さずに死のう。

視界にチラリと三人が映る。自分はだめだったが3人は無事生き残ることができた。村人との約束が守れたことにほっとする。出来ればこれからはあまり危険なことはせずに生きてほしいと思う。

スローモーションのように迫る大鎌。ラクサの脳裏に走馬灯のように今までの思い出が浮かび上がる。両親には死なれ、角は折られ、

仲間からは心ない言葉で虐げられる。思い返すまでもなくいいことのない人生だった。

ただ一つ心残りがあるとすれば師匠のこと。旅続けられなくなっちゃってごめんなさい。約束守れなくてごめんなさい。もし生まれ変われるのなら、次は最初から師匠に遇いたいと思います。

ぎらぎら光る大鎌がラクサの視界いっぱい広がる。

魔族の高笑いが聞こえ、ラクサの意識は途絶えた。

……はずだった。

「まあまったくもう。ラクサのおバカさん。わたしが弟子を見捨てるわけないじゃないさ」

聞こえてくるのは師匠ののんびりした声。目の前にはあの懐かしい背中。

師匠は、実に颯爽と、恰好よく、英雄的にタイミングばっちりで見えた。

「それと君、逃がさないっていったよね」

大剣片手ににっこり笑う師匠と顔面蒼白の敵。

ギャー！ー！ー！ー！という叫び声を最後にラクサの初めての戦闘が終わった。

5・ラクサと戦闘 後編（後書き）

長かった。ちょっとggggしちやったかな？戦闘描写って難しいです。

あ、あとお気に入り登録ありがとうございます！これからもがんばりますよ おなかへったOLZ

読んでくださった方に感謝！！！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6544x/>

after story ~ 名前を捨てた勇者伝

2011年10月22日03時33分発行